

Shunsuke USHIDA's Lecture and Talk-Session

開催日  
2021年7月3日

丑田 俊輔さん

(ハバタク株式会社代表取締役 / シェアビレッジ株式会社代表取締役 /  
プラットフォームサービス株式会社代表取締役)

Report  
第6回



Theme

遊びと学びとまちづくり

フェーズ2第2回目(通算第6回)のゲスト講師には、秋田県・五城目町を拠点に、年会費ではなく「年貢」を納めてもらう方式のシェアビレッジを運営したり、住民参加型の小学校「越える学校」やまちの遊休施設を遊び場にする「ただのあそび場」の取り組み支援、仕掛けづくりなどを行っている丑田俊輔さんを招いた。遊びと学びを融合した、楽しいまちづくりを実践している方だ。講演は五城目町からのオンラインで行われた。

「さあ、あなたも年貢の納め時」です

丑田さんは現在、3つの会社を経営している。暮らしのあり方を考えていくという「シェアビレッジ」、学びをテーマにした「ハバタク」、コワーキングスペースの運営などで時代に合わせた働き方を考える「プラットフォームサービス」だ。もともと東京・江東区で育ち、千代田区にあるコワーキングオフィス「ちよだプラットフォームスクウェア」の運営などに携わった後、2014年に五城目町に移住した。

移住後は、小学校の廃校舎をシェアオフィスに変えた「BAME BASE」内に事業所を構え、ある日、その校舎近くで一軒の茅葺き屋根の古民家と出会ったという。

「仕事の合間の気分転換に、のどかな田んぼ沿いの道を散歩していたのですが、そのとき立派な茅葺きの古民家を見つけました。明治15年建造の建物で、日本の原風景を感じる、美しく、カッコいい建物でした。持ち主は、高齢の方だったのですが、話を伺うと解体が決まっているということで、その後、何度か通ううちに縁ができて、譲っていただくことになりました」と丑田さん。

ただ、丑田さんの一家族だけで住むには大きすぎることに、茅葺きの葺き替えなどに費用がかかることでどうしようかと、地域でできた仲間たちと話し合っているうちに出てきたのが、「年貢」方式のシェアビレッジにするというアイデアだった。「古民家を『村』に見立てて、年会費代わりに『年貢』を納めた方は『村民』になれるというアイデアです。呼びかけのスローガンは「さあ、あなた

住民参加で未来の学校づくり

も年貢の納め時」。村民はこの家に『里帰り』でき、地域のお祭りや屋根の葺き替えなどに参加できるという仕組みです。クラウドファンディングで村民を募集すると800人以上集まりました。

続いて、丑田さんが紹介したのは住民参加型で未来の学校をつくる、という五城目町のプロジェクトだ。「五城目町では小学校の統廃合が進み、現在は1校になっています。その小学校で老朽化による建物の建て替えの計画があり、どんな建物にしていくか、住民参加型で話し合われることになりました。私もワークショップ開催などを手伝わせていただきました」

そして、3か年でまとまったコンセプトが「越える学校」だった。それは校舎の境界を越えて、子どもたちが地域に飛び出し、町民も年齢の境界を越えて学校に参画する、というもの。「地域と共につくる」学校にしようという方針となった。そのコンセプトの肝について、丑田さんは「学校の中心に『生涯小学校工



リア』をつくり、そこは何歳になっても、100歳になっても学びに来られるような場所にしようということになりました。具体的には図書室です。図書室であれば、用事がなくても住民がふらっと入ることが出来ます。もともとあった相撲場の周りは小さな公園にして、だれでもゆとり休めるようなところをしようという話も出ました」と説明。そして、地域に開かれた小学校内の地域図書室「わーくる」が2021年春にオープンした。

右/都会と田舎をつなぐコミュニティとして始まった「シェアビレッジ町村」。もともと解体予定だった古民家が、新たに生まれ変わった。右下/五城目小学校に完成した、誰でも利用できる地域図書室「わーくる」。



朝市に520年目のレポリューションを起こそう

最後に丑田さんが紹介したのは、「こじょうめ朝市(520+プラス)」と「ただのあそび場」だ。五城目町には「朝市通り」という通りが中心市街地にあり、そこでは520年の伝統をもつ朝市が開かれている。

「歴史ある朝市ですが、最近はお店者の高齢化も進み、お店やお客さんが減ってきていました。そんななか、地域の30〜40代の女性を中心に、もう一度朝市を盛り上げていこう、520年目

のレポリューションを起こそう」という動きが出始めたんです。そして、朝市に合わせ、若い世代も気軽に来店できるような「こじょうめ朝市プラス」が始まりました。そもそも朝市は、人が行き交う場で発生した交易の拠点のような場。いろいろな商いが生まれては消えた、実践的なテストマーケティングの場でもあった。

「朝市は、野菜や山菜の販売だけではなく、大道芸人や占い師がいたり、子どもたちが走り回って『商い』に触れたりするような、いろいろな機能をもち場所でした。だから『朝市プラス』も、いろいろなチャレンジができる場所にしようとして再定義されました」

その結果、ウーバーリパーを売る店が出たり、シェアビレッジの村民のお医者さんが朝市のおばあさんたちに「無料健康診断」を行ったり、子どもたちが足湯と肩たたきの店を出したり、思いもかけないことが起きていったという。また、この朝市通りにある空き店舗を使い、まちの子どもから大人まで、誰もが「ただ」で遊びに来られる場所もつくられた。「それは『遊休不動産をもっと遊ばせよう』というアイデアです(笑)。実は五城目町の子供たちは、学校の統廃合が進んだ結果、スクールバスで広

## ボランタリーな経済から新たなビジネスが生まれることも

丑田さんの講演後、高橋さん、菅原さんを交えたオンライン・トークセッションが行われた。

**菅原**：調布市でも私的な空間や空き家を活用して、地域にも開かれ、稼ぐこともできる場所をつくっていかうとしています。空き家を使い、地域社会を支えるような空間をつくりたいということでは、それはコモンズといえるかもしれません。

最初の話に出てきた「シェアビレッジ町村」は、村民も集まり、うまく回っているコモンズなのだと思いますが、一般的にはコモンズ的なことをやろうとしてもマネジメントで苦労することも多いと思います。

**丑田**：たしかにコモンズには、ボランタリーな経済をどのようなあんばいで和えていくか、または捉えるのか、大きな視点が必要かもしれません。たとえば、「ただのあそび場」は完全に貨幣経済を手放した世界です。その背景には、田舎の地価が安いということがありますが、いずれにせよ「ただのあそび場」は最初からマネタイズは考えていませんでした。遊具を作るにしても、地域のいろいろな人たちが持ち寄り、得意な人が作るという贈与経済で成り立っています。

ただ、一方で、子どもたちが集まってくると、その子どもを親御さんが迎えに来て、子どもを待っている間にコーヒーを飲むとか、商店街で買い物をするとか、そんなことが増えていきます。そうすると、「どうもあそこは人でにぎわっているようだから、店を出してみるか」と考える挑戦者が出てきたりするかもしれません。

ボランタリーな経済が入り口になって、そこから派生したつながりの資本が豊かになって、新たな商売が生まれるなど、リアルな経済がまわっていくこともあると思います。

**高橋**：ご紹介いただいた取り組みのすべての根底に「遊び」があり、とても興味深いお話でした。そもそも社会の近代化とともに暮らしの中から遊びがなくなり、余白がなくなって、びりびりした風潮になって、まちの中から子どもの姿も消えてしまったというような状況があります。そんな中、今日は「レボリューション」の話もありましたが、「遊び」をキーワードにまちを新しく組み替えていこうという取り組みは、これから富士見町で進めていくプロジェクトの参考になります。

**菅原**：調布は、東京の中では都会と田舎が混じり合った「郊外」という位置づけをされるのですが、調布というまちが持つ可能性について、丑田さんはどのように感じになりますか。

**丑田**：東京には奥多摩もあって、へたをすると秋田よりも田舎なところもあるかもしれません。調布は都心部のコミュニティにも近く、絶妙な立ち位置にあるように感じます。

たとえば、調布で暮らしながら奥多摩の山をみんなでシェアして、その木材を富士見町のリノベーションに使うとか、千代田区の人も巻き込んで、シェア農園をつくってみるなど野菜を育てるとか、そんなことができそうな、バランスのとれた場所ではないでしょうか。

いエリアから通学していて、放課後に友だちと遊び歩けるような機会が減っています。そこで商店街の中に気軽に遊びに来られるような場所をつくってみようと考えました。豪華な遊具も設備も置かず、遊び方が決まっているわけでもない「ただ」の遊び場です」

「ここも子どもたちが集まる場になり、さらにその「ただのあそび場」が入る建物にカフェができた、周辺にも小さなお店や職人の工房などができ、活気づいていった。」

丑田さんは「五城目町で取り組んできたこと、体験したこと、すべてのベースに遊び心や余白のようなものがあつたように思います。」

今は「Playful Economy」遊びから始まる経済、ということを考えています。一人の遊び心を起点に、仲間が集い、新しい価値が生まれる。そして、そこで生まれたコミュニティがまた他のコミュニティとつながって大きな生態系になる。

これからは公（パブリック）でも私（プライベート）でもない、共（コモンズ、共有資源）をコミュニティで持つことが大切だと思います。調布市でもぜひ、子どもから大人までみんなが遊び、学び続けることができるようなコモンズ、未来をつくっていった方がいいです」と話し、講演を締め括った。



商店街の遊休不動産を活かしてつくられた「ただのあそび場」。地域のコモンズ(共有資源)として、子どもたちが自由に遊び、多くの人を集める場所になっている。

### ここがポイント!

## 調布市の未来への活かし方

丑田さんの話で特徴的だったのは、キャッチーなキーワードも使いつつ、みなさんが本当に楽しみながらまちづくりが行われていることでした。まちづくりにはシリアスな問題も出てきますが、やはりまずは「楽しさ」を共有しなければ、

多くの人を巻き込むことはできません。笑顔があふれるような仕組みや仕掛け、そしてビジネスの引掛かりのようなものをしっかりつくっておくことが大切だと教わりました。



菅原大輔さん

